

米国ではビートルズに次いで2位、全世界では1億万枚をセールス

ビリー・ジョエルは、ロックンロール界において、もっとも才能にあふれたシンガー・ソングライターのひとりだ。曲作りにつねに真剣に取りくんできたビリーは、しばしば時代に足跡を残すような音楽を作り、レコーディングすることが自分の目標だ、と語っている。そして、時代の変化にも耐えられるような、不朽の名作を書くのが夢だとも。

ビリーが影響を受けた音楽は、彼が創ってきた音楽同様、多岐にわたっている。クラシック音楽の教育を受けた彼にとって、最初の音楽ヒーローはルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンだった。そこからジャズの巨匠デイヴ・ブルーベック、スタンダード音楽の作曲家ジョージ・ガーシュイン、R&B界の御大レイ・チャールズ、1950年代のロッカー、ファッツ・ドミノ、“ウォール・オブ・サウンド”の創立者フィル・スペクター、そしてビートルズへとつながっていく。

そうした音楽アイドルからインスピレーションをもらったビリーは、自作を物にしていった。〈ニューヨークの想い〉は、デイヴ・ブルーベックの伝説のアルバム《テイク・ファイヴ》同様、ジャズの普遍性を感じさせる。今ではポップ・スタンダードとなっている〈素顔のまま〉は、ガーシュインの曲をカバーする際のバラード・シンガーたちと同じ情熱でレコーディングされている。敬愛しつづけたレイ・チャールズとはヒット・シングル〈ベイビー・グランド〉を一緒にレコーディングもしている。〈ロックンロールが最高さ〉には、ファッツ・ドミノの60年代のヒット曲同様、ロックへの情熱が溢れている。〈さよならハリウッド〉は、フィル・スペクターに捧げる秀逸のオマージュだといえた。アルバム《ナイロン・カーテン》はビートルズなくして生まれなかったアルバムだった。

ビリーのシングルは33曲中13曲がトップ10入りを果たし、そのうち〈ロックンロールが最高さ〉(1980年)、〈あの娘にアタック〉(1983年)、〈ハートにファイア〉(1989年)はアメリカン・チャートでナンバーワンに輝いている。またアルバム・セールスの面から見れば、アメリカでもっとも売れたアルバム総数においてビートルズの後に続いている。

そして日本、オーストラリア、イングランド、フランス、ドイツ、スペイン、イタリアでも熱心なファンを持つビリーは、全世界で1億枚以上ものレコード・セールスを誇る。さらに、あまたの賞にも輝いている。たとえば6個のグラミー賞、トニー賞、アメリカン・ミュージック賞等々。世界に名だたる最高の“ピアノ・マン”として知られるビリーだが、エンタテイナーとしての彼のスタイルは、反抗的なロック・スター、ラウンジ・シンガー、ドゥーワップ流行歌手、クラシック音楽の作曲家、繊細なバラード歌手、ブロードウェイの作曲家などカメレオンのように変化してきた。

2001年、クラシック・アルバム《ファンタジーズ・アンド・デリュージョンズ〜ミュージック・フォー・ソロ・ピアノ》がリリースされるや、全米ビルボードのクラシック・アルバム・チャートでナンバーワンに輝く。この快挙には、ビリーのアイドル、ベートーヴェンも脱帽したにちがいない。ビリーは、影響を受けた音楽スタイルをしっかりと把握し、さらなるレベルへと昇華していった。

そんなビリーゆえ、人によって評価が分かれることもまた確かだ。ファンからは愛されているものの、批評家からは説教されることもしばしば。また音楽とは違う理由でメディアに取りあげられることもままある。私生活にトラブルが少なくないからだ。抜き足ならぬ薬物濫用、世間騒がせの離婚、こじれた契約、そして腹立たしい訴訟問題。クリスティ・プリנקリーとの悲しい離婚から立ちなおれず、深酒に溺れたこともあった。

2004年、55歳という年齢で22歳の女性と再婚したが、メディアのあいだでは、果たして真実の恋なのか、それとも若さに目がくらんだだけなのか、論議を呼んだ。しかも結婚式のわずか数カ月後に、ビリーは自らクリニックに入院し、度重なる心労からアルコール依存症になっていたことを告白した。『エンタテインメント・ウィークリー』誌などは、彼を“墮落した飲んだくれ”と批判した。

ヤク中、アル中を乗り越え、新記録を樹立した 2006 年 MSG 復活公演

そんなビリーが、ファンを酔わせたのは、2006 年のことだった。同年 1 月 23 日、午後 8 時 23 分、私はマディソン・スクエア・ガーデンのステージから、ほど近い席にすわっていた。ビリーにとって薬物中毒のリハビリから復帰後初めて行うニューヨーク・シティ・コンサートのオープニング・ナイトだった。マディソン・スクエア・ガーデンでのコンサート史上、新記録となる 12 回のソールドアウト・コンサートの初日が、まさに始まろうとしていた。

場内の照明が落ち、ステージ中央にビリーと彼のグランド・ピアノがせり上がってきた。歓声とともにいっせいに立ちあがる観客。〈怒れる若者〉のイントロが鳴りひびくと同時に、この瞬間を待ちわびていた 1 万 8 千人の歓声と喝采が、演奏さえもかき消してしまうほどだった。

黒の T シャツに黒のスポーツ・ジャケット、それにゆったりしたブルージーンズという服装のビリーは、もはや多くのファンが記憶しているアルバム《ストレンジャー》のジャケット写真のような、初々しい若者ではない。身体は丸みを帯び、頭頂部は禿げあがり、こめかみあたりにわずかに残った灰色の髪は、両脇で短く刈りこまれている。それは、彼の灰色の山羊ひげと口ひげによく合っていた。

〈怒れる若者〉が終わると、彼は雷のようなスタンディング・オベーションを受け、満面の笑みを客席に投げかけた。2 曲目の〈エヴリバディ・ラヴズ・ユー・ナウ〉を歌いおえると、ビリーはオーディエンスに語りかけた。

■「来てくれてありがとう。みんな、ダフ屋からチケットを買ってないだろうね」

ダフ屋とのあいだで長年にわたるバトルを繰りひろげていたビリーは、これまで通常の料金よりもはるかに低い金額をコンサート・チケットに“額面”として印刷してきた。今ツアーのチケットの“額面”金額が 100 ドル以上になることはなかった。

〈さすらいのビリー・ザ・キッド〉では、ロングアイランドのオイスター・ベイを歌う箇所ので、歓声があがりとなって沸きおこった。ビリーは、いまだにロングアイランド / ニューヨークのローカル・ヒーローであり、この MSG コンサートは彼にとって比類なき帰還祝いだといえた。また、この日は 2006-2007 ワールド・ツアーの幕開けでもあった。

〈ニューヨークの想い〉のイントロが始まると、場内は一気にヒートアップし、ニューヨーク・シティ・オーディエンスのあいだに強い仲間意識が広がっていった。そして、ぱりっとした黒いビロードのジャケットを着たリッチー・カナータが、ビリーの傍にきて、お馴染みのサキソフォン・ソロを吹くと、曲はソリッドなジャズのムードに一変した。オリジ

ナル・レコーディングでプレイした本人によるパフォーマンスは極上だ。ビリーのステージで演奏するのは数年ぶりのリッチーも、曲の核になっているサックス・ソロを万感の想いで吹いていた。オーディエンスは拍手喝采でそれを迎え、ビリーは曲の合間にこうアナウンスした。

■「サキソフォンには、ニューヨーク、ブルックリンからリッチー・カナータ！」

聴きなれたヘリコプターのプロペラ音で、〈グッドナイト・サイゴン〜英雄達の鎮魂歌〉の演奏が始まり、もうひとりの旧友、ビリー・ザンビーノがスネア・ドラム・ソロを披露した。

続く〈ムーヴィン・アウト〉では、リッチーが、ビリー・ジョエル・ツアーの常連であるふたりのミュージシャン、クリスタル・タリフェロとマーク・リヴェラとともに再登場。そして、この 3 人がステージ前方で 3 パート・サックス・セグメントをプレイした。この部隊でただひとり姿が見えないのは、長年ドラマーを務めてきたリバティ・ディヴィートだ。ファンたちは、彼の不在を心から残念に思っていた。

ビジネス上のトラブルや最近の禁酒について、ビリーはオーディエンスにあえて説明することはなかったが、〈グレート・ウォール・オブ・チャイナ〉の曲紹介のとき、彼はこう言いになった。

■「この曲を僕の元マネージャーに捧げます」

それと同時に、彼はイタリア式“くそくらえ！”ジェスチャーで、何百万ドルもの金を着服した男に向かって、握りこぶしを突きたててみせた。

〈イタリアン・レストランで〉を歌いながら、ワインを選ぶ歌詞を次のように変えてうたった。

■“白ワインのボトル / 赤ワインのボトル / それとも、ジンジャーエールがいいかい？”

また、アルバム《ニューヨーク 52 番街》のジャズ・ソング〈ザンジバル〉では、■“ピート・ローズはゲームの花形選手だ”とうたったあと、2006 年ヴァージョンに変えてうたった。

■“だけど、彼にはロックの殿堂入りは果たせない”

この夜、グランド・ピアノが置かれているステージ前方の台は、曲ごとにちがう方向を向くように電子制御されていた。さらにステージ奥の左右には、エレクトリック・キーボードが回転できるように配されていた。こうすることで、ステージ後方に詰めかけた観客も、背中姿だけでないビリーの演奏を愉しめるように配慮されていた。

オーディエンスは、ロングアイランド、コネチカット、ニュージャージー、そしてニューヨーク、広い範囲からやってきていた。なかには、ティーンエイジャーや幼児とその両親といった家族連れもいた。世代を越えた筋金入りのファンもいた。私の右側では、黒のレ

ザー・パンツ姿の痩せた女性が、すべての曲の歌詞を大声で熱っぽくうたっていた。彼女は歌詞の合間に「愛してるわ、ビリー」と声をかぎりに叫んでは、肩までの長さの髪を、ゴーゴ・ダンサーのように激しく振りまわした。観客のおよそ半分は立ちあがって曲のタイトルや歌詞を大声で叫んでは彼らのアイドルに声援を送り、残りの半分はじっとすわって注意深く耳を傾けていた。

ショー全体が精密な機械のように動いていた。バラード曲〈シーズ・オールウェイズ・ア・ウーマン〉でも、リズムックな〈リヴァー・オブ・ドリームス〉でも、曲調に分け隔てなく、どの瞬間も緻密な計算のうえに構成されていた。すべての照明が、ビリーとそのバンドの動きに合わせて入念に計算されつくしていた。

20 曲目、“ロック版歴史の授業”ともいえそうなテンポの速い〈ハートにファイア〉では、グランド・ピアノはステージ下に姿を消し、そしてステージ前方にギターを首からストラップでぶらさげたビリーが登場。

■「次の曲で僕が歌詞をまちがえたら、一緒に歌ってほしい。そうしないと、ただの残骸になっちゃうからね」

そう笑いながら客席に告げた。デジタル・カメラのまばゆいフラッシュが、マディソン・スクエア・ガーデンを埋めつくしたオーディエンスの姿を浮かびあがらせた。客席のあちこちでたかれるフラッシュは、夏の夜のホタルのように光り輝いていた。

ビリーはワイアレス・マイクのスタンドを持つと、ステージから客席に向かって、それを突きだした。そして〈ビッグ・ショット〉では、ステージ上を歩きまわり、サクソとギター・ソロの合間にジーン・ケリーを思わせる軽快な動きでダンスも披露した。

この夜は、ユニークな場面がいくつもあった。ビリーは、MC でこう紹介した。

■「僕らは、素晴らしいロックンロール・シンガーをひとり失いました。ウィルソン・ピケットです。彼を称えるために、この曲を贈ります」

そして、彼とバンドはピケットのヒット曲〈ザ・ミッドナイト・アワー〉の演奏へと突入した。曲が終わると、彼は自らステージ前方に出ていき、ファンが差しだすバラの花束を受けとった。さらに〈ロックンロールが最高さ〉では、イントロに合わせて即席のジグを踊ってもみせた。〈ガラスのニューヨーク〉の演奏が終わると、ステージの端まで行き、ファンたちに触れたり、握手を交わしたりもした。

午後 10 時 27 分、ビリーがステージから去り、照明がゆっくりと落とされていった。いつしか客席が青い光で満たされていた。オーディエンスが携帯電話の電源を入れ、それを開いて頭の上で揺らしていた。ウッドストックではビック・ライターがキャンドル代わりに使われたように、音楽が人と人とを結ぶロック・コンサートの素晴らしい光景だった。

アンコールを求める手拍子が 2 分間つづいた後、ジーンズ姿のビリー・ジョエルがグランド・ピアノの前に戻り、カトリック娘に捧げる〈若死にするのは善人だけ〉を歌いだすと、全方向性のステージ・ライトが色とりどりの光を炸裂させた。それは、同曲がリリースされた当時、大流行していたクラブ“スタジオ 5 4”の良き時代を想起させるものだった。

午後 10 時 41 分。ビリーは■「ありがとう、ニューヨーク！」と叫び、会釈した。バンドがステージから立ちさる際、彼はまるで見捨てられたかのように、辺りを見まわした。やがてバンド・メンバーがステージに戻ると、耳慣れたハーモニカ・イントロが鳴りわたった。マディソン・スクエア・ガーデン全体が青と紫のライトに美しく染まり、会場は凶暴なまでの歓声に包まれ、いつしか全員がビリーとともに〈ピアノ・マン〉を合唱していた。初のヒット・シングル〈ピアノ・マン〉をリリースしてから、すでに 30 年以上がたっていた。うたい終えたビリーが客席にいった。

「ありがとう、ニューヨーク！誰にもだまされるなよ」

ビリーがコンサートの最後に残す、お決まりのセリフだった。全 23 曲、オーディエンスは 2 時間 26 分にわたって、ビリー・ジョエルの音楽をたっぷり愉しんだ。ビリーも 1 万 8 千人のファンから、変わることもない親密な声援を受けとった。

多くの批評家が、ビリーにとって栄光の時代はもう終わった、と見なしていたが、地元ニューヨークで記録破りの凱旋コンサートを成功させ、劇的なカムバックを果たしたピアノ・マンは、まさに勝利を手にした英雄だった。

“ビリー・ワールド”を支えた仲間の光と影

見事、復活劇を遂げたビリーだが、そのキャリアにおいて、いくつかのターニングポイントがあった。なかでも70年代、スターとなっていくビリーのサウンドを支えたバンド・メンバーとの物語は、とても重要だろう。サキソフォンのリッチー・カナータ、ドラムのリバティ・ディヴィート、ベースのダグ・ステッグマイヤー、ギターのラッセル・ジェイヴァース、彼らは、ビリーのキャリア中、もっとも貢献してきた音楽仲間だといえる。何年ものあいだ、彼らはレコーディング・スタジオに入っていないときも、世界規模のコンサート・ツアーで地球のあちこちを旅してきた。5人のあいだの友情は、揺るぎないものだった。

リッチー・カナータ、ダグ・ステッグマイヤー、リバティ・ディヴィート、ラッセル・ジェイヴァースの4人は、ビリーにとってブルース・スプリングスティーンの“ブラザー・バンド”Eストリート・バンドと同様だった。ともに成長し、ともに演奏し、ともに旅し、ともに音楽を作り、そして—ツアー・バスや飛行機のなかで—人生をともにしてきた、離れがたい親友同士だった。

しかし、時がたつにつれ、金銭問題、プレッシャー、ドラッグ、そして名声が彼らの友情を腐食していった。最初に離れていったのは、リッチー・カナータだ。彼は1980年初め、“相互同意によって”バンドを脱退した。彼はビリーとともに稼いだ金をもとに投資し、今ではレコーディング・スタジオを経営している。ダグ・ステッグマイヤーはその後、何の予告もなしにビリーから解雇された。彼はすっかり生気をなくし、絶望のあまり自ら命を絶ってしまう。リバティ・ディヴィートは、2003年までバンドに留まっていたが、あることを境にビリーとの関係がこわれてしまう。リバティはビリーに援助を求めた。

「離婚して、前妻が全財産を持っていっちゃった。なんとか援助してもらえないかな？ って、あいつに頼んだんだ。今まで、あいつがヒット曲を作るのに手を貸してきたけど、印税は一切もらってなかったしね。すると翌日、ツアー・マネジャーが電話してきて、『だめだ！』の一言さ。そこで、あいつに手紙を書いた。あいつの飲酒癖やマネジメント問題に正面から向きあった内容でね。みんな、俺があいつの信用を傷つけたって言った。けど、あいつは実際にリハビリ施設に入って、俺が正しいことを立証したのさ」

その後、ビリーは2006年のコンサート・ツアーを発表したが、リバティに参加するよう声をかけることはなかった。30年間、ツアーをともにして初めてのことであった。ドラマーは追放された不満を、無然としてこう語る。

「あいつにしてみれば、“ビリー・ワールド”を抜けたあとは、この地上からも消えてほし

いんだろうけど、俺にとっては“ビリー・ワールド”後の人生だって、あるわけだからね！」

06年のコンサート・ツアーには、リバティ・ディヴィートは呼ばれなかったものの、リッチー・カナータがふたたび参加した。そして同ツアーのバンド・メンバーには全員、非開示契約にサインすることが要求された。ビリーに雇われているあいだ、追放されたドラマーと言葉を交わすことを禁じる、という内容のものだった。

友人や同僚のなかには、ビリーがケチで、自らの利益だけに捕らわれているとみなす者もいる。ラッセル・ジェイヴァースは語る。

「バンドとビリーとのあいだには、最高の相互作用 {ルビ：ケミストリー} があるって、僕はずっと信じていた。ビリーとは12年間も一緒にプレイしてきたのに、ある日、車を運転していたら、カーラジオからビリーが新しいメンバーでニューアルバムを出したっていうニュースが流れてきた。まさに、寝耳に水だったよ。僕には電話の1本もかけてくれなかった。その後、ビリーがダグと僕は金のことしか頭になんて語ってる記事を読んだ。自分の名誉のために言うけど、金のためだけにやっていたなんて冗談じゃない。ずっとビリーのもとでプレイしてきて、金持ちになんてなれなかったんだからね」

現在、ラッセル・ジェイヴァースは音楽業界から完全に身を引き、香港で玩具製造業にたずさわっている。

ある者は、ビリーのことを同情心があり、心から寛大な人物だと称す。またある者は、不親切で、気むずかしく、ひねくれていて、つきあいにくい人物だと評する。近年、ビリーは飲酒問題や度重なる自動車事故等、トラブルも絶えない。彼の運転に関して、コロムビア・レコードのある社員はこう語った。

「ハンプトンズに住んでいる友人によると、彼の運転はかなりひどいらしい。地元では笑い草になっているようですよ」

また長年の友人のひとりはこちら語る。

「明るくて楽しいやつである反面、彼には暗い一面もあるんだ。幼い頃に父親が家出したことで、深く傷ついたんだと思うよ。彼の心には感情の隙間があって、ここ数年はそれをアルコールで埋めようとしていたんだと思う。あれだけの富と財産がありながら、そうせざるを得ないなんて悲しいよね」

親の離婚になにかしら心的外傷を負ったにちがいないビリー。彼の楽曲、たとえば〈ロザリンドの瞳〉〈ウィーン〉〈君はクリスティ〉〈眠りつく君へ〉などの歌詞には、家族のことが多く登場する。そこには、ヒット曲に隠された、ビリーの思考過程が垣間見えそう。そして、いろんな問いが湧いてくる。

父親はなぜ、母親のもとを離れたのだろうか？

ときに夢の河、ときに失望の海である“ビリー・ジョエル”という物語

2001年、ビリーの祖父の歴史はドキュメンタリー番組『ザ・ジョエル・ファイル』の主題として取りあげられた。制作したのは、ドイツの映画製作者、ベアテ・タルバークで、ビリー本人も参加している。

1938年、ナチが、ユダヤ人によるドイツ会社の所有は違法であると宣言し、ビリーの祖父、カール・ジョエルはベルリンの衣服製造工場の売却を余儀なくされた。カールは、妻や息子とともにナチ・ドイツを逃れ、キューバ経由でアメリカ合衆国に亡命した。そして移ったニューヨーク・シティで、息子のハワードはロザリンドという女性に出会い、恋に落ちる。やがて、ふたりは結婚し、ビリーとその姉ジュディをもうけた。

父ハワードはクラシック音楽の教育を受けたピアニストで、音楽への愛情を幼いビリーに注ぎこんだ。ビリー少年は4歳から8年間、クラシック・ピアノを習う。その後、ジョエル一家はロングアイランドのレヴィタウンに引っこすが、やがてハワードは家族を残し、ひとりヨーロッパへ行ってしまう。ロザリンドはビリーとその姉を育てるために、様々な職探しに追われた。

60年代、ビリーは強面のストリート・キッドとしての評判をほしいままにしていた。だが、皮ジャンに身を包み悪ぶってはいたものの、内面は複雑で敏感なミュージシャンだった。ロックンロールの世界に惹かれた彼は、67年、地元ロングアイランドのグループ、ハッスルズに加入。彼らのサウンドは、白人ソウルに60年代末のサイケデリックなロックをミックスしたものだ。その後、ビリーはアッティラという、短命のデュオにも参加。やがてシンガー・ソングライターとして芽が出始めた頃、ビリーは人生最悪の経験をする。ある契約を結んでしまうのだ。さらに、71年に発表したデビュー・ソロ・アルバム《ゴールド・スプリング・ハーバー》は、意に反した速度でレコーディングされ、ニューヨークの音楽シーンがいかにアンフェアで非情なものかを、ビリーは思い知らされた。

業界に嫌気がさした彼はロスアンジェルズに移り、一時的に別のステージ・ネームを名乗った。さらに生計を立てるため、サン・フェルナンド・ヴァレーのラウンジでピアノの弾き語りもした。その時の経験から、初のスマッシュ・ヒットとなる代表曲〈ピアノ・マン〉が生まれる。

その後、コロムビア・レコードの社長クライヴ・デイヴィスに見いだされたビリーは、ロスアンジェルズからニューヨーク・シティに帰る空港からのバスの中で、生まれ故郷に戻った喜びを嘯みしめた。そして、彼のもっとも有名な曲〈ニューヨークの想い〉が生まれた。

ビリー少年にとって、それはどれほどの影響を及ぼしたのだろうか？

初期の頃に、ソングライティングの版權を譲りわたしてしまったのはなぜなのか？

ビリーの成功にとって、プロデューサーのフィル・ラモーンはどれほど助けになったのだろうか？

すべてのビートやリフ、そしてすべての音は、実際にビリーによって書かれたものなのか？

バンド・メンバーたちは、それについてどんな意見があるだろうか？

エルトン・ジョンとのツアーは、どんなものだったのか？

なぜ、ビリーはロックに背を向けてしまったのだろうか？

一部の人が主張するように、ビリーは魅力的ではあるが誤解されやすい音楽の天才なのだろうか？

音楽の裏に隠されたビリーの真実の姿とは？

ビリーが親友の妻を寝とったというのは本当なのか？

彼はクリスティ・プリנקリーとの離婚から立ちなおったのか？

彼の近年の落ち込みはなにが原因なのか？

それが理由で、酒に溺れるようになったのだろうか？

車を立木や建物にぶつけたその背景にあるものは？

彼をリハビリ施設に入るように勧めたのは、3人目の妻、ケイティ・リー・ジョエルだったのか？

これまでの人生で出会った女性たちとビリーの関係は？

列挙した疑問の答えを見つけるために、読者はまずナチ・ドイツまで時代をさかのぼる必要があるだろう。

セカンド・アルバム《ストリートライフ・セレナーデ》とサード・アルバム《ニューヨーク物語》には、ビリーが個人的な想いを託した楽曲が収められている。〈エンタテイナー〉は、過酷なレコード業界に対する痛烈な批判であり、〈さよならハリウッド〉は、ウエストコーストへの訣別の歌である。FM ラジオでのパワープレイにもかかわらず、レコードの売れ行きは、せいぜい彼を“カルト”アーティストとみなす程度までにしかならなかった。

そうした現状を打開したのが、1977年に発表した傑作アルバム《ストレンジャー》だった。大ヒットとなったこのLPは、リリースと同時に、サイモン&ガーファングルの《明日に架ける橋》を追いこし、コロムビア・レコード史上もっとも売れたアルバムとなる。レコードの溝からは、彼の多才さが見事なまでに輝きを放っていた。反抗的にロックする〈ムーヴィン・アウト〉、繊細な〈素顔のまま〉、そして論議を呼ぶ〈若死にするのは善人だけ〉、彼はソングライター／パフォーマーとしてだけでなく、ロックの新チャンピオンの座についた。

その後、ビリーは次々とヒット曲を量産していった。〈マイ・ライフ〉〈ビッグ・ショット〉〈ガラスのニューヨーク〉〈ロックンロールが最高さ〉〈アレンタウン〉……。アーティストとして成長し変化していくなか、私生活も新たな展開を迎えた。マネージャーでもあった妻エリザベスと離婚し、仕事上の手綱を義兄であるフランクに委ねたのだ。しかし、その判断がとんでもない悪夢に変わることになる。

他方、ビリーは人生で最高のインスピレーションとなる人物と出会う。スーパーモデルのクリスティ・プリנקリーである。彼女はビリーにとって、最愛の女性として知られている。クリスティにインスパイアされたビリーは、〈アップタウン・ガール〉を含むいくつかのヒット曲を書きあげた。そして作られたビデオ・クリップにスーパーモデルのガールフレンドと出演したことで、数カ月間にわたってMTVのレギュラー・ローテーションで流された。

クリスティと再婚したビリーは、86年にアルバム《ザ・ブリッジ》を発表し、レイ・チャールズとのデュエット曲も収録。歴史に足跡を残したいと望むビリーは、87年にソ連ツアーを行い、大きな話題を呼ぶ。同ツアーからは、大成功を収めたアルバム、ビデオ、そしてテレビの特別番組が生まれた。

89年のアルバム《ストーム・フロント》では、20世紀の文化をひもとくために、ビリーは歴史の授業をロック・ソングに置きかえてみせた。アルバム、シングルともに全米ナンバーワン・ヒットを記録。93年のアルバム《リヴァー・オブ・ドリームス》でも全米アルバム・チャートでナンバーワンの座に輝いた。

そして99年12月31日の夜、ニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンで行

われた世紀のイヴェント、ミレニアム・イヴ・コンサートの模様は、ライヴ・アルバム《ビリー・ザ・ライヴ!〜ミレニアム・コンサート》に収められた。世紀が改まった2001年には、クラシック作曲家として登場した。

本書は、永遠に“ザ・ピアノ・マン”として語りつがれる男の、魅力的な、そして、ときには論議を呼ぶ人生とその経歴を描いたものだ。ビリーの物語は、ときには夢の河であり、また、ときには失望の海でもある。ビリー・ジョエルのキャリアを築いたのは、40年にわたるセックス、ドラッグ、そしてロックンロールだった。そして、それはたしかに、この類い希なミュージシャンの人生に、様々な影響をおよぼしてきた。

本書ではビリーの音楽的キャリアを辿るだけでなく、その音楽の背後に潜んでいたものも描きだした。現存する3人のバンド・メンバーであり、元親友でもあるカナータ、ディヴィート、ジェイヴァースが、深く突っこんだインタビューに答えてくれた。彼らが、いかにして名声の戦いのなかで犠牲者になったか、初めて赤裸々に語ってくれたのだ。

さらにはビリーのアイデンティティの源流とも思われる、ナチ・ドイツの動乱を生きぬいた祖父の物語、両親の離婚、さらにはオーストリア在住の腹違いの弟との関係にいたるまで、家族史すらも深く掘りさげていくことにする。